

書簡 七 (新編井月全集 514)

ごせい ぜんしゅつはるちかむらしもまき か のう よ そう ばいちく か のう そうじゅうろう ごせい おじ あた か じゃく? はるちか
五声は前出春近村下牧の加納与惣、梅竹は加納惣十郎、五声の叔父に当り、蝸石は東春近
むらかみとのじま ほそだち わじ? ごせい はは おい みやだむらいとう そうじしぞう つぎ につうおなじ
村上殿島の細田知和次で五声の母の甥である。(宮田村伊藤左右司氏蔵。次の二通同)

せいよう ぎょけいせん りどうふう め で た く もうしおさめそうろう そんな お そろいますます ごせいしょうあそぼされ ごちようれいきょうえつ しごくにぞんじ
青陽の御慶千里同風芽出多久申納候。尊館御揃益御静祥被遊御重齡恐悦至極奉

たてまつりそうろう みぎねんとう ごしゆくし すべくもうしあげたてまつりぐ さつささげそうろう きょうこうきんげん
存候。右年頭の御祝詞為可奉申上捧愚札候。恐惶謹言 {新年のあいさつ文であ

る。}

しょうがつなの か せいげつ
正月七日 井月

ごせいくん ばいちくくん かじゃくくん さんにんにんおんちゅう
五声君 梅竹君 蝸石君 参人々御中

{「蝸石」の読みが判らない。仮にかじゃくと読んでみたが、間違っているかも知れない。}

なおなおねない なにかと ごこんめいをこうむ ありがたきあわせにそうろう せいぼちよつと うかがい つかまつるべくころえまかり
尚々年内は何廉御懇命ヲ蒙り難有仕合候。歳暮鳥渡も伺口(一字不明)可仕心得罷

ありそうろうところ かれこれふによいまぎ がち もうしわけ これなくごそいん ひらに ごかいじよなくさるべくそうろう
在候処、彼是不如意紛れ勝、申訳も無之御疎音、平二御海恕可被成下候。【なお、旧年中

は何かと親切にしてください、ありがとうございます。年の暮れの挨拶にうかがうつもりでしたが、いろいろ思うようにならず紛れがちとなり、ご疎音になったこと申し訳ありません。平にお許し下さい。】{「懇命」は親切にすること。「不如意」は思うようにならないこと。「海恕」は海のような広い心で許すこと。}

ひとつ さいたんずり ようやくでき あいなり しかるところえ ぐ うちもつともだいいち べに さしつかえ なんともまいど ごむしんもうしあげ
一、歳旦摺も漸出来に相成、然ル処絵の具の内最第一の紅に差支、何共毎度御無心申上

そうろうこと ごさそうらえども おてせい なまべに ほど たかついわくごぶちよつけいくらい えん ちょうだいしたく なにとぞごそん
候事には御坐候へ共、御手製の生紅〇程(高津曰五分直径位の円)頂戴仕度、何卒御尊

ぼさま よろしくねがいあげたてまつりそうろう おとりつぎくだしおかれそうろうようひとえにねがいあげたてまつりそうろう きょうきょうとんしゅ
母様に宜奉願上候。御取次被下置候様偏奉希上候。恐々頓首【歳旦摺も

ようやく出来ました。しかし絵の具のうち一番大事な紅色が足りず、毎度お願いしていることですが、お手製の紅を頂戴したく、なにとぞお母上様によりしくお願いします。お取次ぎをお願いします。】{「歳旦摺」とは、門人たちの俳句を集めて一枚の刷り物にし、新年を祝う席で披露するものだった。その刷り物に、めでたい挿絵を入れるため、紅の絵の具を頂戴したい、というの

だろ。}

さいはく あま あらしきしな ござそうら えども ほしがきいち わつぶさに きらんそうろう まことにもって としだま しるし
再白、余りあらく敷品には御坐候へ共、干柿一把備貴覧候。誠以(以カ御カ)年玉の印

まで ござそうろう ごしょうりゅうぐだされそうら え せんりょう いたり ござそうろう なおきんじつさんをもってばんばんもうしあげたてまつるべく
迄に御坐候。御笑留被下候へば千両の至に御座候。尚近日以参万々可奉申上

そうろう ふぐ
候。不具【追伸。粗末な品ですが、干し柿をお年玉として差し上げますので、受け取っていただけたら嬉しいです。なお近日お目にかかって、いろいろ申し上げます。】{「再白」は追伸のこと。「不具」は整わない文章ですみません、という意味。}